

## 校正を終へて

六月二十九日は石割松太郎先生の祥命日である。そして去年のその日は七周忌に當つてゐた。丁度その頃に、修文館の編輯部から、先生のお書きになつたものを出版したいが、纏めてくれないかと云ふ御相談に接した。が、思ひ設けぬことで何の準備も無かつたのと、私は別に急しい仕事に追はれてゐた折でもあつたので、再三の御申出にも係はらず、遂にお断りをしてしまつた。

しかし妙なもので、その後それが機因となり、いつしか折にふれて編纂のことを考へるやうになり、古雑誌なども心して見るやうになつてゐた。

初冬の頃、演劇博物館の山本二郎氏より、先生の遺稿集を出したいと云ふお申出があり、年の瀬も押詰つた二十九日の夕刻、わざわざ來阪され陋屋をお訪ね下さつた。その折に、私の計畫致してゐる事をそつくり申上げたところ、是非その計畫を實現して欲しい、要は、先生のお

書きになつたものを、もう一度世に送り、世人の認識を新にすることにあるのだから、出来る限りの援助は惜まないと、返つて御激励を受けることとなり、實を申せば、この時にやつと出版の腹が定まつたのである。その後も、山本氏からは絶えず御激励を賜つて今日に至つてゐる。なほ、今春になつて後藤興善氏からも御同様な提案があり、私の賛成を求められたのであるが、その折には既に計畫が熟して、修文館との間に話が進められてゐた折であつた。

この選集を編纂するに當つて、最も困難を感じたのは寫真版のことであつた。幸ひに豊竹古鞆太夫氏、大阪圖書館の山村太郎氏の御厚宜によつて、必要な分はほとんど取揃へることが出来た。なほ、御兩處からは數々の御教示を賜り、まことに感謝にたへない。謹んで御禮を申上ける次第である。

その他に、種々御高配を忝うした羽仁新五氏、御多忙中にも係らず心良く裝訂をお引受け下さつた齋藤清二郎氏、捜しあぐんで諦めてゐた「酒屋」のお園の寫真をお送り下された鴻池幸武氏、カシラの寫真を揃へて下さつた文樂座の中村利雄氏、又、攝津大掾の孫に當られ、本社

を「いなるの芝居」の近くに持たれると云ふことから、この計畫に算盤を離れて御盡力下さつた修文館社長鈴木政雄氏、編輯部の沖寮介君、これらの方々の御厚情なくしては、本書を世に送ることは、とうてい不可能事であつた。在天の御靈もさぞお喜びであらうことを信じ、厚く謝意を表するものである。

昭和十八年九月十日

盛 田 嘉 徳